

## 公益社団法人五所川原青年会議所2020年度理事長所信

理事長 田 中 宏 明

### 【はじめに】

昭和39年2月29日、五所川原青年会議所は青森青年会議所がスポンサーとなり日本青年会議所に254番目の会員会議所として認承され正式に入会となりました。その後、昭和、平成、令和と半世紀余りの時を経て、今、私達が青年会議所運動を行えるのは、先輩諸兄の弛まぬ努力のおかげです。

私達の住み暮らすふるさととは、全国的に進む人口減少・少子高齢化に伴って経済に暗い影を落とし、また、人手不足が顕在化し、それは将来的にさらに深刻化する事が予想されています。われわれ五所川原JAYCEEは、ふるさとの将来を憂い、そして明るい未来を思い描き、その実現に向けて仲間と共に歩みを進めなければなりません。

意志あるところに道は開ける。令和の新しい時代を迎えた今、社会は急速に変化し将来の予測が困難になってきています。私達はその将来を何もせずを受け入れるのではなく、より良い未来を切り開く意志を持ち運動を続けていく事で、ふるさとの明るい未来を創造できると信じております。

### 【信頼できる組織づくり】

国の公益法人制度改革が2008年に施行され、当会は2012年1月5日、公益性の認定を受け社団法人から公益社団法人へ移行しました。地域の活性化を目的に多数の団体が活動を行っている現在、公益法人格はその中で重要な役割を担っています。今後に於いても当会は、地域から信頼される団体であり続ける為に公益法人としての責務を果たしていかなければなりません。

その為に、総務委員会が中心となって、「組織の軸」となる総会を企画運営すると共に定例会を円滑に行う事で組織の基盤を支え、まちづくり・ひとづくり運動の推進に繋げて参ります。また、財務局・事務局を両軸とした執行部が、行政と連携して「財務管理・法制管理を両立」させると共に、「効率的な組織運営を確立」し、それが遂行されるよう率先して会全体を導いて参ります。そして、当会の運動を積極的に地域へ発信する事で当会の運動を多くの人に理解していただけるよう努めて参ります。

「盤石な組織運営」と「公益法人としての責務の履行」、それを基盤に行われる運動を地域に発信する事で、地域からより信頼される公益社団法人五所川原青年会議所を目指して参ります。

### 【市民参画の推進】

私達が生まれ育ち愛するふるさと五所川原。かつてのバブル期には、中心街は多くの若者で活気に溢れていました。しかし、この地に於いても全国的な人口減少・少子高齢化が進み、それに伴う人手不足も顕在化し地域の衰退が懸念されております。ふるさとの明るい未来の創造に向けて、このような地域課題へのアプローチは市民参画によるものでなくてはなりません。

その為には、2012年度から行われている五所川原市と当会の共催による「市民討議会」を今年度も開催し、市民がまちづくりに携われる機会を創出いたします。また、近隣自治体に於いても、その土地の特色を活かした独自のまちづくりを推進しており、地域のより良い未来を目指す当会も同様に、「特色を活かした事業」を自ら主体的に考えて実施し、さらには共感できる市民参画意識の醸成を目指します。

「市民参画の機会の創出」と「共感できる市民参画意識の醸成」を続けていく事で、ふるさとに根付くコミュニティの形成に繋がり、延いては活気ある明るいふるさとを創造いたします。

### 【未来を切り拓く青少年】

現代の子ども達は、私達が子どもだった頃に比べ、経済成長や情報通信システムの整備等により生活水準が向上した反面、ライフスタイルや社会構造が変化した為に、子どもらしい自然体験や遊びの機会の減少や、社会性・倫理観の低下が懸念されています。青少年の健全な育成を目指す当会としても、大人の責務としても、未来を担う子ども達が健やかに成長できる機会を創出しなければなりません。

その為には、「じょっぱりロード～OMOIYARIへの旅～」を今年度も開催し、子ども達が泊りがけの徒歩修行を通して、自分がつらい時でも他の子を思いやる気持ちや、健全な社会性と倫理観を育みます。また、日々の学校生活には無い体験による成長の機会として、「想像力」豊かで新しい時代を主体的に切り拓く青少年の育成を目的とした事業を開催いたします。

事業を通して培う日本固有の「思いやり」の精神と「想像力」は、子ども達の心を豊かに成長させ、自身の今後と予測困難な地域の未来を、主体的に切り拓く希望の光であると信じております。

### 【地域の伝統文化の継承】

先人達の自然災害への脅威から豊作を願い生まれ、古くからこの地に伝わる虫おくり、昭和48年、当会が火まつりの要素を取り入れ「虫おくりと火まつり」が誕生しました。地域の幸せを願うこのまつりは本年で48回を数える伝統文化として定着していますが、虫おくり団体の減少や後継者不足等の課題もあります。地域が誇れるこのまつりが未来永劫に続くよう、より発展させ伝承しなくてはなりません。

その為には、会員のまつりに対する意識共有を図りながら、奥津軽虫と火まつり「親善大使」事業を本年も行い、まつりについて、次世代を担う子ども達へ意義を伝承し、地域へ広く伝え、さらに参加できる環境を整えます。そして、奥津軽虫と火まつりが神事である事を尊重しながら、関係団体と意識を共有し連携を密に図り、虫おくり団体減少と後継者不足の打開策を共に模索します。

幾度となく天災を「不撓不屈の精神」で乗り越えてきた先人達。その「弥栄への願い」を雄大な「第48回奥津軽虫と火まつり」に乗せ、地域へ広く伝播いたします。

### 【繋げ深める友情】

青年会議所は20歳から40歳までと年齢制限がある為に、同年代の会員が多くその仲間と楽しく交流する場でもあります。しかし、近年の人手不足から会員の社業が忙しくなりつつあり、会の活動へ積極的に参加しにくい現状が見受けられます。会員の参加率の低下は、事業の質・規模等に様々な影響を及ぼし、負のスパイラルへ陥る可能性を持っています。

この課題への取組として、スポーツや文化を通した「ENJOYできる会員交流」を行い、共に楽しみながら同じ時間や達成感を共有する事で、会員相互の仲間意識や連帯感を醸成いたします。また、当会の「先輩方と交流」する機会を設け、当会の運動に一層のご理解とご協力を賜れるようにすると共に地域交流を深めて参ります。

会員が仲間意識を持って皆が同じベクトルで活動する事で、当会の運動はより強く地域に伝播します。何よりも、苦楽を共にして深められた絆は、一生涯、解ける事が無いと信じております。

### 【将来を見据えた拡大運動】

近年の人口減少に伴う人手不足により、会員候補者や会員が多忙である傾向にあり、入会しにくく退会しやすい状況にあります。そのような中、会員は40歳で卒業する為に年を追う毎に会員が減ると予想されます。会員拡大は、拡大するほど紹介できる会員候補者が増えるので拡大しやすく、会員が増えれば役割分担して効率的に事業を行える上、規模の大きい事業も選択できる為に魅力ある運動に繋がり、その魅力は拡大を推進します。この右肩上がりのスパイラルに当会を導いていかなければなりません。

その為には、担当特別室が中心となって、会員拡大の重要性を周知し、会全体で会員拡大に取り組む事は元より、特に新入会員による会員拡大にスポットを当てる事により、さらなる会員拡大に繋げて参ります。また、新入会員が会員と打ち解けられる機会を設けると共に、会員交流委員会と連携して新入会員をサポートできる体制を整えて参ります。

会員拡大は全ての源。JC活動を通して得た経験と仲間は全て自分の財産であり、その全てが入会から始まります。4年後の60周年は60人、65周年は65人と、多くの仲間と活気溢れる五所川原JCを目指して参ります。

### 【結びに】

私は2011年に入会しました。当時は世間知らずで、人前で堂々と話す同年代の人達に驚きを覚え、こんな世界もあるのかと思いながら、その頃は出会った仲間と交流する為に運動に参加していました。しかし数年後、財務局長を任せられる機会があり、その後は委員長を2年、副理事長を2年、周年実行委員長を1年と身に余る経験をさせていただき、様々な事業に携わる中で、関係諸団体の皆様や先輩諸兄そして会の仲間達からは、多くの学びをさせていただき、また支えて下さいました事を心から感謝しております。

さて、「ふるさとの明るい未来の創造」この明るい未来とは何か？

価値観が多様化する現代にその正解はありません。だからこそ、こうありたいと思う未来を設定しなければ結局は成り行き未来に留まってしまいます。そして未来は現在が創っています。「ふるさとの明るい未来の創造」その実現は、今この時、私達がそれに向かっているかにかかっています。明るい未来を望むなら、それに向かって努力を積み重ねよう。これまで先人達が行ってきたように。\_\_

# 基 本 計 画

## 【 基 本 理 念 】

一人一人の  
想いを重ね、力を合わせ  
ふるさとの未来を共創する

## 【 基 本 方 針 】

- 1、信頼できる組織をつくり、運動を発信する
- 2、市民参画を推進し、共感できる市民参画意識を醸成する
- 3、想像力豊かに、未来を切り拓く青少年の育成
- 4、地域と共に雄大な「奥津軽虫と火まつり」の開催
- 5、繋げ深める友情、ENJOYできる会員交流
- 6、会員拡大は全ての源、将来を見据えた拡大運動

## 【 LOM スローガン 】

Do it, all

～みんなでやってまれ～

## 青年会議所（JC）とは

### ◇理念と目的

青年は理想に燃え、未来への期待を常に強く持っています。希望に満ちた明るい豊かな社会、正義が行われる理想の社会の実現を心から熱望するために、青年は次代の担い手として大きな責任を自覚し、新しい世界のための推進力にならないと考えます。

青年のこの夢を実現するため、同じ理想と使命感を持つ若い世代の人々を広く共通の広場に集め、友情を深めつつ、強く影響し合い、刺激しあって、“若さ”がもつ未来への無限の可能性を自分たちの手で効果的に描き出し、“明るい社会”を目指して、青年の情熱から生まれる果敢な行動を結集すべく、組織された団体が青年会議所（JC - JuniorChamber）です。

「われわれ J A Y C E E（青年会議所会員）は、社会的、国家的、国際的な責任を自覚し、志を同じうする者、相集い、力を合わせ青年としての英知と勇気と情熱をもって明るい豊かな社会を築き上げよう」との綱領は青年会議所の決意、行動理念と目標を明確に表現しています。

### ◇特 質

青年会議所を他のすべての団体から区別する最大の特徴は、会員の“年齢制限”にあります。会員はいかなる人種、国籍、性別、職業、宗教であってもかまいませんが、年齢満20歳から40歳までであることを要し、“品格ある青年”でなければなりません。したがっていかに長時間にわたり、有能で活動的な会員であっても、満40歳に達したら退会しなければなりません。この素晴らしい年齢制限のゆえに、青年会議所は絶対に若さを失わず、常に希望に溢れ、未来に向かった前進を続ける団体として活動することができるのです。

青年会議所は世襲経営者のサロンクラブではありませんし、単に社会奉仕を行う団体でもありません。青年会議所は未来を目指し、よりよき明日をめざしてわれわれの住む地域社会・国家・全世界のために、われわれが今日の犠牲を払うことを厭わず、常に進歩への挑戦を行う、理想と具体的総合的な施策をもった青年指導者の運動です。

### ◇組 織

会員は自分が住んでいる都市にある青年会議所に所属しています。われわれが会員であることは市民としての自発的な自由な意志によるのです。それゆえこの運動の単位は、あくまで各地青年会議所の日常の活動にあります。

1949年9月、東京に始まった日本の青年会議所運動は、60年の歳月を経て、戦後日本の民間運動の白眉といわれるほどの拡大発展をとげました。現在、日本の隅々にわたり、704都市で活動を続け、会員約4万名を擁する、青年運動最大の団体となりました。全国704の青年会議所はそれぞれ集まって、47ブロック協議会を構成し、さらにそれが日本を10地区に分ける地区協議会に集められ、それらを総合調整する機関として日本青年会議所があります。日本青年会議所は国際青年会議所（J C I - JUNIORCHAMBERINTERNATIONAL）に加盟し、国際的なJC運動の一翼をになって活動していますが、世界中では約17万人の会員が同じ理念のもとに国際的な同志感をもって運動を続けています。

## ◇事業目標 “社会と人間の開発”

創立以来の“個人の修練、社会への奉仕、世界との友情”の青年会議所の三信条は、われわれの運動60年の展開の中で、年を追って具体化され、青年会議所運動とは要するに、“指導力開発と社会開発”であるとの事業スローガンに固まってきました。われわれ会員は市民社会の一員として市民と共通の生活基盤に立ったものの考え方見方を出発点とし、市民の共感を求め、住みよい明るい豊かなまちづくりに向かって努力するとともに、青年会議所の日常活動の場を通じ、われわれ個人をよりよく開発することが青年会議所運動にほかならないと考えます。

青年会議所の“指導力開発”とは民主的な集団指導力あるいは集団運営能力の研究と実践であるといわれます。まず会員個人がすぐれた市民、職業人であるために自ら厳しく訓練し、さらに市民社会の中であって、市民を目標に向かつて一致協力するように働きかけながら市民とともに進む、その全過程が青年会議所のいう指導力開発です。

指導力開発を推進するもっとも有効な手段として、青年会議所は“社会開発計画”事業を中心とする運動をもっています。一市民でもある会員が住むまちの明るい豊かな明日のために、それぞれまちの問題を市民の中から掘りおこし、市民とともにその解決をはかるという方法です。

青年会議所運動は自由な自発的な意志より加入した会員の起こす運動であるからには、われわれのまちの運動、市民運動の中心でなければなりませんし、市民にその意志を認められなければなりません。

青年会議所の目標は明るい豊かな社会の創造であり、その新しい社会をリードするにふさわしい人を数多くつくることです。青年会議所とその運動は決して完成されたものではなく、社会の進歩とともに、さらに発展していくと思われまます。

青年会議所は時代とともに新しい呼吸を続け、次々と新しい青年がこの団体を背負っていきます。

青年会議所は常に英知と勇気と情熱を持った青年を求め、その門戸を大きく開いています。

2,000字解説文より

## 国際年会議所 JayceeInternational, Inc. (JCI)

JCIは青年の世界でも最も強固で、大きな団体です。「すべての国、民族、宗教を含めた青年の集まり」それがJCIのモットーです。

1977年1月末日現在の構成は、100NOM (NationalOrganizationMembers)、約8,600LOM (LocalOrganizationMembers) があり、全会員数は約32万名です。

- ①個人の能力の開発
- ②青年の協力による社会開発（精神面、福祉面）
- ③より深い世界的相互理解の推進

これらの主目的に沿ったプログラムを調査－研究－計画－実行－評価の活動過程を通じて有益な指導力を取得し、また人間的向上を図る機会を活動の主体である青年が追求すると同時に世界に対して種々の働きかけて行うことがJCIの目的です。

JCI (JuniorChamberInternational) 運動の始まりは85年前の1915年にアメリカの一都市セントルイスに住む青年達が「青年も、事業あるいは市民生活の諸問題に関与すべきである。」との主旨のもとにUnitedStatesJuniorChamberofcommerceを設立しました。その後、清廉な言動が一都市から全米へ、更に世界各国に発生を促すことになり、続々青年団体が設立されました。

そして、1946年第一回国際青年会議所の会議がパナマで開かれ、国際的活動が開始されました。JCIは75カ国(NOM)、12,000チャプター(LOM)のJCが加入しており、会員数(Jaycee)は約320,000人に達し、同一目標をめざしております。日本は1951年、第6回会議で初めてJCIへの承認を受けてから、現在においてはアメリカに次いでJayceeの最も多い国へと拡大しました。JCIは結成以来、毎年1回加入国のいずれかでJCIの最高議決機関である世界会議が開催されており、日本に於いても1957年第12回会議が東京で、1966年には京都で第21回、1980年には大阪で第35回、1986年には名古屋で第41回、2000年には札幌で第55回世界会議がそれぞれ開催されました。皇太子殿下の御臨席を始め、各国の著名士が多数参加のもとに、世界各国からの代表団を日本に迎え、JCI世界会議の歴史の輝かしい多大な成果を残しました。また、JCIは世界会議の他に6地域に分けて、各地域ごとに毎年一団地域会議を開催しており、1952年東京で第2回アジア地域会議(1962年よりJCIの定款改正でJCIコンファレンスと改称)が開かれました。日本はJCI加入以来、毎年世界会議に多数の代表を送り、JCI発展に寄与している。JCI内部においても高く評価されており、日本から初めて、1970年度JCI会頭に前田博君が、また、1981年度には長尾源一君が選ばれました。同じ目的を達成するため世界各国のJCの結束がJC運動を世界的規模でとらえ、JC運動の発展を図ろうとするものであります。

## 日本青年会議所（日本JC）

第二次世界大戦後、日本の社会は精神的にも物質的にも極度に荒廃した状態であった。現状を一日も早く收拾し、新しい秩序を打ち立てなければならないという声次第に高まって来ました。この時、経済界に活躍している青年達の間に一つのグループ。を作ろうという機運が生まれました。そのグループの目的は、青年がお互いに切磋琢磨し、今後の日本の各界における指導者としての基盤を確立し、青年らしい情熱を燃やして“より良い社会”を着々と実現してゆこうというものであります。

このような趣旨のもとに集まった青年の手によって東京青年会議所（その後商工会議所法の制定により、青年会議所と改称）が1949年9月3日に設立された。これが日本における青年会議所運動の先駆であります。

このような理想主義的な運動は日本各地の指導的的青年層に深い共感を与え、大阪、名古屋、前橋、広島、岡山等に続々と青年会議所が誕生しました。これらJC相互の連絡のため「全国青年会議所懇談会」が1950年に開催され、次いで翌1951年2月9日に7都市のJCを会員とし、全国的な統合体として社団法人日本青年会議所が設立され、通産大臣より認可されました。さらに1951年カナダのモントリオールで、開催された国際青年会議所第6回世界会議で日本JCのJCI加入が認承されました。日本JC設立以来、現在まで40余年、その間日本JCは急速な拡大をみました。1998年現在、753余のローカル青年会議所（LocalOrganizationMember 略してLOM）その個人会員数は、6万余名に達しました。

### 日本JCの組織及び機能

日本青年会議所の機能は各地ローカルJC（LOM）の活動が円滑活発に行われやすくするため、LOMへの連絡調整の機能をつとめるとともに対外的にはJCIの構成メンバー、すなわち国家JC（NationalOrganizationMember 略してNOM）としての機能を果たしております。

日本JCの組織は1967年9月の組織改正によって大幅に変更され、縦にはJCIの一員でNOMとしてJCIの地域担当の副会頭（VPO）の統括下にあります。

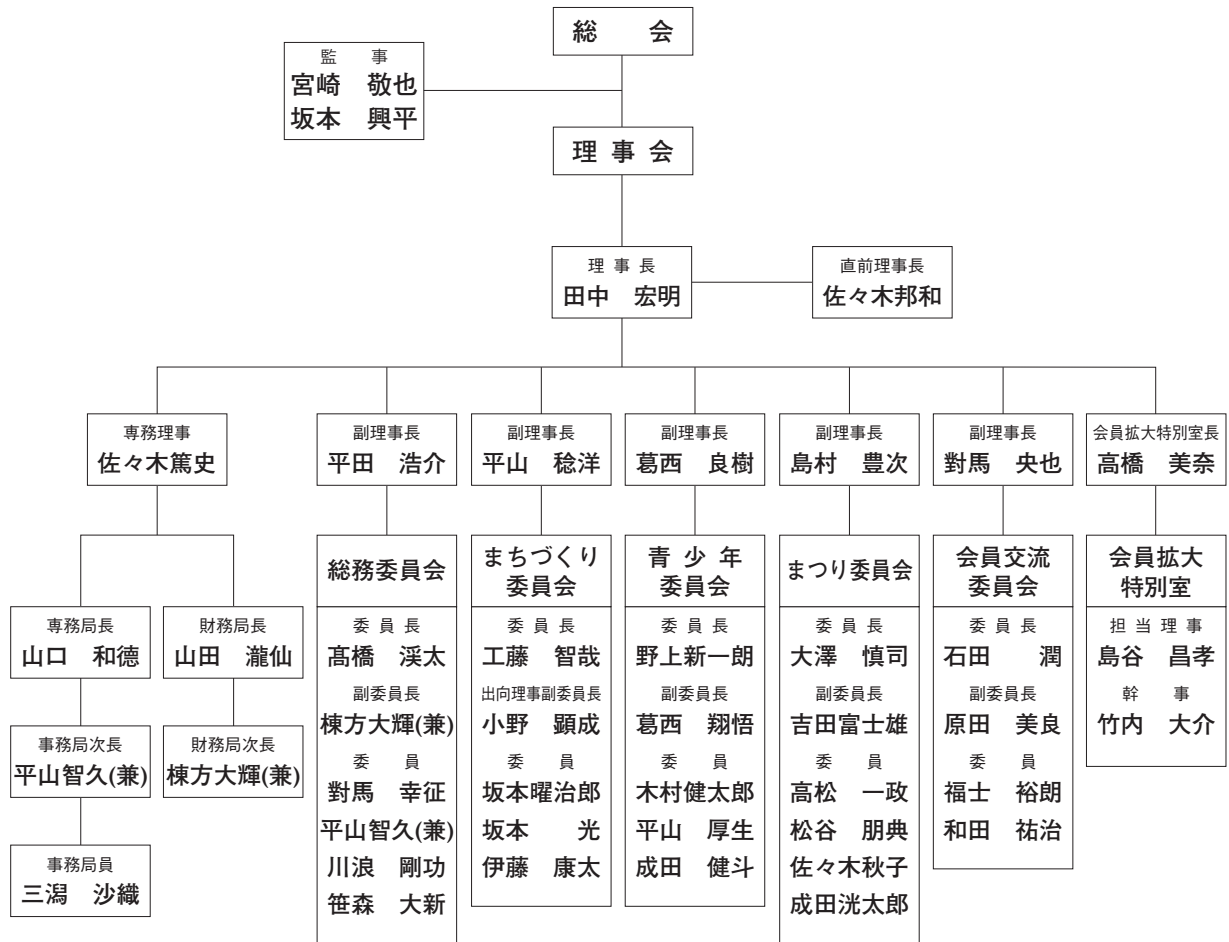
国内組織において、各会員会議所は各地区担当常任理事の統括下にあります。各ブロック協議会会長（評議員）につながっており、LOMとして日本JCの構成員であります。日本JCには最高の意思決定機関として総会（日本JC定款20～29条）がありますが、その下に評議員会、理事会があって日本JCの執行機関の機能を果たしています。



## 公益社団法人 五所川原青年会議所 2020年度 理事及び監事

理 事 長	田 中 宏 明
直 前 理 事 長	佐々木 邦 和
専 務 理 事	佐々木 篤 史
副 理 事 長	平 田 浩 介
副 理 事 長	平 山 稔 洋
副 理 事 長	葛 西 良 樹
副 理 事 長	島 村 豊 次
副 理 事 長	對 馬 央 也
会 員 拡 大 特 別 室 長	高 橋 美 奈
総 務 委 員 長	高 橋 溪 太
ま ち づ く り 委 員 長	工 藤 智 哉
青 少 年 委 員 長	野 上 新 一 朗
ま つ り 委 員 長	大 澤 慎 司
会 員 交 流 委 員 長	石 田 潤
会 員 拡 大 特 別 室 担 当 理 事	島 谷 昌 孝
出 向 理 事	小 野 顕 成
事 務 局 長	山 口 和 徳
財 務 局 長	山 田 瀧 仙
監 事	宮 崎 敬 也
監 事	坂 本 興 平

公益社団法人 五所川原青年会議所2020年度組織図



## 2020年度 出向者一覧

### 〈日本青年会議所〉

■渉外委員会 委 員 高 橋 美 奈

### 〈東北地区協議会〉

■東北青年フォーラム運営委員会 委 員 平 田 浩 介

■東北ゼミナール委員会 委 員 工 藤 智 哉

### 〈青森ブロック協議会〉

■LOM支援委員会 副 会 長 佐々木 邦 和  
委 員 川 浪 剛 功

■アツイ青森実現委員会 委 員 福 士 裕 朗

■青森を護る青森を創る委員会 委 員 平 山 厚 生

■総務広報委員会 委 員 吉 田 富 士 雄

■アカデミー大学 塾 長 小 野 顕 成  
運 営 幹 事 平 山 稔 洋  
塾 生 伊 藤 康 太  
塾 生 佐々木 秋 子  
塾 生 平 山 厚 生  
塾 生 竹 内 大 介  
塾 生 山 口 和 徳  
塾 生 和 田 祐 治  
塾 生 笹 森 大 新  
塾 生 成 田 健 斗